

R6 年度平和使節団 個人報告書

牛久市教育委員会生涯学習課

研究課題：空爆や原爆の被害

牛久第一中学校 2年 井上 侑海

1 参加の動機

私は、被爆者の方と直接会って、被爆した時の体験談をお聞きしたかったからです。また、広島平和記念公園や資料館の展示物や建物を見たり、広島市内の被爆した施設に行ったりして、広島でしか得られない情報を知りたかったからです。

2 研修の記録

(1) 講話「戦争の時代と牛久」から学んだこと

牛久は農村部だったため、直接被害を受けることは少なかったのですが、隣の市町村に土浦海軍航空隊や第一海軍航空隊、霞ヶ浦海軍航空隊があったから空襲等で爆撃機が通るルートになっていたそうです。空襲の被害は少なかったとは言え、毎日のように爆撃機が通っていたことを考えると多くの人が不安な気持ちになっていたと思いました。

(2) 被爆体験者のお話から学んだこと

語り部の梶本さんは原爆が投下された時、広島市の半径2kmは焼け野原になって、火傷した人や怪我人、死体で溢れ、地獄のようだった、とおっしゃっていました。また原爆が炸裂した時に放射線をまき散らしたことで、直接、熱線や爆風の影響を受けていなくても、白血病や癌になった人がたくさんいたことを教えてくださいました。私はそのことを知って、核兵器は一瞬で大切な命や人間の幸せを奪ってしまう酷いものだと思います。

(3) 広島への訪問から学んだこと

平和記念公園を案内してくれたガイドさんは、原爆が投下された時に広島にいたのは日本人だけではなく、アメリカ人や朝鮮人など外国の方もいて、犠牲になったとおっしゃっていました。日本人以外の人も犠牲になったことを知ってとても気の毒に思いました。また、広島城では、原爆が投下される前後の城の様子について資料を見ることができました。広島城は爆心地から740m離れていますが、原爆が投下された後、天守閣をはじめ、城内の建物が全て崩れてしまったことを知りました。核兵器は、とても大きな破壊力を持っていることを知り、何があっても使ってはいけないものだと思います。

(4) これから私たちにできる（していきたい）こと

語り部の梶本さんは「忘れられた歴史は繰り返される」ということと、「つらくなっても死を絶対に選ばないでほしい」とおっしゃっていました。この言葉を聞いて、広島訪問で聞いたり見たりした核兵器や戦争の恐ろしさについて、家族や友人など身近な人に伝えたいと思います。また、これから開催される牛久の文化祭や一中の平和の集いで広島訪問で感じたことを伝え、多くの人に共有していくことが私たちにできることだと考えました。

3 研修を終えて

語り部の方と対談することで、本やインターネットには載っていない被爆した方の生の声を聴くことができ、貴重な体験となりました。本当につらい思いをされた語り部の方の心情は、本や資料を通して知るより、深く心に響きました。また、原爆ドームや資料館の被爆品や写真を生で見、原爆が投下された時と同じことを繰り返すことは絶対にしてはいけないと思いました。

研究課題：原爆時の広島について

牛久第一中学校 2年 横山 沙季

1 参加の動機

現在ウクライナとロシアが戦争しているのでまた核兵器が使われたらどのような被害が出るのか、戦争当時はどのような生活をしていたのか、まえ被爆後のことを知りたかったからです。

2 研修の記録

(1) 講話「戦争の時代と牛久」から学んだこと

当時の牛久市は直接戦争の影響を受けていたわけではなかったが、多くの男性が兵士として戦地に送られていました。また情報の面では、戦争が負けていたとしても負けている報道ではなく活躍した兵士などの情報が多く流されていたため、正しい情報と変わってしまったり矛盾が発生したりしていたことを知りました。

(2) 被爆体験者のお話から学んだこと

今回講話をしてくださったのは梶本さんです。梶本さんは当時工場の中で作業をしていた時に被爆の被害にあったといいます。そこでも多くの人が命を落としたといいます。梶本さんには資料だけではわからないことをお聞きしました。梶本さんあら自殺する人見たり、目の前で多くの人が亡くなったのを見たりした、という話を聞き、私は命を大切にすること大切さを知りました。

(3) 広島への訪問から学んだこと

私は広島での訪問で命の大切さを学びました。原爆では約 14 万人の人が亡くなってしまいました。亡くなった人は悪いことをしていなかったのに、たった一つの核兵器で多くの人が亡くなってしまったことを知り私は今ある一つの命を大切にしたいと思いました。

(4) これから私たちにできる（していきたい）こと

私がこれからできることは、周りにいる家族や友人、親せきなどに広島での訪問で学んだことを広め教えていきたいと思いました。また学校などで発表することで多くの人に広めていきたいと思いました。

3 研修を終えて

私は研修を終えて命の大切さや自分たちが学んだことをしっかりと周りの人に広めていき、このようなあやまちが繰り返されないように、学んだ自分たちが広め伝えていきたいと思いました。

研究課題： 「戦争のことを知り次の世代に伝えていく」

牛久第一中学校 2年 鍛田 壮太

1 参加の動機

私が中学生平和使節派遣事業に参加した動機は、戦争の悲惨さを広島に行って知り、次の世代に伝え、これから戦争を起こさないようにするためです。

2 研修の記録**(1) 講話「戦争の時代と牛久」から学んだこと**

私が「戦争の時代」と牛久から学んだことは戦争の被害や空襲をあまり受けていなかった牛久市でも日本全体が戦争に関わらなければいけない時代で、徴兵制もあったので自由に働いたり生活したりできる環境生活できる環境ではなかったことに驚きました。また、新聞では日本軍が戦争で優勢であるかのように書かれていましたが、実際は、戦争に負けていたので報道が嘘をついていたことにも驚きました。国民の士気を上げるために嘘を書いてはいけないと思いました。牛久市は戦争による直接的な被害は少なかったのですが人々の生活が大きく変わりました。食料や衣類、金属も不足したので、米の配給制や金属回収令が発令されお米も足りなかったのはかわいそうだと思います。

(2) 被爆体験者のお話から学んだこと

被爆者の梶本さんのお話で特に心に残ったことが三つあります。一つ目は、被爆者の梶本さんが下敷きになったことです。原爆後、梶本さんの意識が戻った時に肩から下が建物の下敷きになっていたことです。頭と手だけしか動いてなかったのであきらめていたのですが、近くにいた友達が生きていたので自分も気を取り直して足から大量出血しながら出たと言っていました。友達が生きていたから自分も生きようとしてあきらめなかった気持ちがすごいと思いました。

二つ目は、14歳の中学生が公園に友人の死体を運んだことです。原爆の影響で火災が発生した時、地面にあった死体を踏みながら行動しなければなりません。公園に転がっている死体を見て何も感じなくなってしまうかわいそうだなと思いました。私はこの話から原爆は人の死ではなく人の心も変えてしまうものだと感じました。

三つ目は、梶本さんの最後の話です。梶本さんは「今は自分のやりたいことをやれる、戦争中は生きているだけで精いっぱいだった」と話して下さいました。私はこの言葉を聞いて「命を大切にしていきたい、いつ何が起こるかわからないので今の自分を大切にしたい」と思いました。

(3) 広島への訪問から学んだこと

広島城では壁の石落として敵の侵入を邪魔したり、攻撃を防ぐために堀の長さを調整したりしていることを知りました。戦争の対策がすごいと思いました。旧日本銀行広島支店では一階と地下室は放射線などによる倒壊を免れました。爆心地から380メートルしか離れていなかったのに残っていて、すごいと思いました。また被爆の2日後に銀行を再開したのにもびっくりしました。旧陸軍基地では爆心地から2700メートルも離れていたのに、原爆の爆風で鉄の扉が曲がっていました。原爆の威力を改めて実感しました。

(4) これから私たちにできる(していきたい)こと

私がこれからできることは二つあります。一つ目は、生きることです。今何が起こるのか分からないので、命を大切に生きていきたいと思います。二つ目は、伝えることです。今回の平和使節派遣事業で戦争の悲惨さや命の大切さなどを学びました。学んだことを次の世代に伝えることが一番大事だと私は思っています。原爆で多くの人が亡くなったり、建物が崩壊したりしたその当時の状況を知って私たちが感じることを伝えることで、戦争を起こさないような気持ちをもってもらえればと思います。

研究課題：戦争の惨禍と当時の人々の生活を掘り下げよう

牛久第一中学校 2年 仲内 梨紗

1 参加の動機

現在私たちが原爆のことについて知っているのは本やインターネットで得た情報だけなので、現地でしか得られない情報を知り、「より平和の大切さを学べたらいいな」という思いで参加しました。

2 研修の記録

(1) 講話「戦争の時代と牛久」から学んだこと

戦争当時の牛久は直接戦場になったわけではないが、戦争と無関係ではいられない状況でした。牛久に限らず、物資不足により食料が食べられない状況にもかかわらず、戦況を伝えるラジオや新聞では、戦果の誇張・損害の隠蔽などの誤った情報が大多数だったそうです。

(2) 被爆体験者のお話から学んだこと

被爆体験者の梶本さんから、資料を見ただけではわからない戦況・梶本さんの実体験や、そのころの状況を教えていただきました。

梶本さんは当時中学三年生で作業中の際に被爆したそうです。その日死んでしまうとは思っていなかったと思います。原爆によって年末までに約 14 万人の方々がお亡くなりになられたそうです。

現在も自殺などで 1 年に約 2 万人の方々がお亡くなりになっています。梶本さんから「嫌なことがあっても死を選ばないで」「命を大切にしてください」とおっしゃっていただき、命を大切にしていこうと思いました。

(3) 広島への訪問から学んだこと

広島への訪問により、今までの知識がより深まり、改めて戦争・原爆の恐ろしさと平和の大切さを感じました。また、「私たちが今楽しく過ごせているのは当たり前のことではなかったのだな」と思い、今あるこの生活を大事にしていこうと思いました。

(4) これから私たちにできる（していきたい）こと

戦争を実際に体験された方が高齢化のため減少しています。資料館をはじめとして、私も直接お話を聞くことができた一人として、空襲から逃げる時の気持ち、助けたくても助けられない気持ち、家族と離れ離れになり再開した時の嬉しさ、その時のおにぎりのおいしさなど、実際に体験した人しかわからない感情や状況を、戦争を知らない人たちにその一部だけでも伝えていくこと、それが広島で直接語り部さんのお話を聞くことができた私たちがすべきことであると考えています。

3 研修を終えて

被爆した町、当時の戦況の資料などを実際に見たり、語り部の方にお話を聞いたりすることで、本やインターネットで見るよりも被爆による被害、戦争の恐ろしさを実感することができました。今回の広島研修を通して今の暮らしを大切に、今回学んだことを少しでも多くの人に伝えていこうと思いました。

研究課題：78 年前に起きた現実と受け継ぐべきもの

牛久第三中学校 2年 山本悠吏

1 参加の動機

小学校の授業では戦争で原爆が広島・長崎に落ちて、被害を今も受け続けている人がいる事ぐらいしか教えてもらってなくて、実際にそのような戦争の悲惨さを自分の目で見てみたいとずっと思っていて、このような機会を頂きぜひ参加したいと思ったからです。また、原爆が投下された理由や、当時の日本の状況を考えていきたいと思ったからです。

2 研修の記録

(1) 講話「戦争の時代と牛久」から学んだこと

戦争は長崎・広島・沖縄などが有名でも他の地域でも戦争に関係することが起き、日本すべての地域で戦争とは無関係ではいられない時代でした。そのため牛久も戦争と深く関係していました。戦争のために人も物も全てが戦争に利用されていました。そのため武器の制作に使う金属類を普段家庭で使用されている鍋や銅鐺までも溶かして武器の材料にしていたといえます。

牛久は幸い空襲の対象となりうる軍事施設などがなく、直接的な戦争の被害は少なかったそうです。しかし近隣の霞ヶ浦には大きな軍の施設などがあり、空襲の対象となり、牛久の上空は爆撃機の通り道となっていたそうです。

(2) 被爆体験者のお話から学んだこと

私たちと同年代又はそれ以下の子供が空襲による火災による延焼を防ぐために、被爆地の建物を壊す作業を行っていたため、よりたくさんの犠牲者を出しました。原爆は世界的にも珍しいT字型の橋である相生橋を目標に投下されました。そしてその原爆から諦めずに泥臭く生き抜いてくれた被爆者の方々がいるため、戦争のことをよく知ることができました。

(3) 広島への訪問から学んだこと

私は牛久平和使節団として広島を訪問し、平和の大切さについて学んできました。私たちが訪問したところにはどこも戦争との関わりがあり何年たっても戦争の傷跡は癒えないということがわかりました。そして「戦争は繰り返してはいけない」と言われていますが、被爆者の方々は「戦争は二度と繰り返してはいけない、平和な今が本当に幸せなことに気が付いてほしい」と言っていてテレビで聞くような言葉の何倍も重さがありました。

(4) これから私たちにできる（していきたい）こと

私たちはまだ子供で戦争から国を守るほどの力はありませんが、広島へ行ったという経験があるため、まず身近な人たちに学んできたことを発信し、広島の人たちの思いや命の尊さを精いっぱい伝えていきたいと思います。そしてつらそうな顔をしている人がいたら声をかけて、少しでもその人の笑顔が増えるようにしたいです。

3 研修を終えて

戦争は当時の環境をめちゃくちゃにして、いつも通りに過ごしていた人たちの日常を奪っていきましました。そしてその様な戦争は今も他の国で行われていて、とても悲しいことだと思います。これ以上、戦争による被害を増やさないためにも自分たちができることとして、いろいろな人たちに学んだことを伝えていくことが大切ということが分かりました。

研究課題：平和の大切さ

下根中学校 2年 小池 伊織

1 参加の動機

原爆の被害を目の当たりにすること、被爆体験者の方から直接お話を聞くことで本やインターネットで調べるだけでは分からない戦争の恐ろしさと現実とその影響、平和の大切さをより深く理解したいと思ったからです。

2 研修の記録

(1) 講話「戦争の時代と牛久」から学んだこと

当時は戦争のために人も物資も全てが動員され戦争と無関係でいらなかった時代でそれが牛久にもあったということが分かりました。牛久市は空襲による直接的な被害は少なかったが物資的にも金銭的にも人々に多大な負担を強いたことを知り、戦争への関わり方は様々でそれぞれの地域によって異なる苦しさがあったのではないかと考えました。

(2) 被爆体験者のお話から学んだこと

お話の中で「夢、希望、肉体が一瞬にして燃えた」「人間の心をなくし、平気で死体を踏んだり、またいだりしていた。地獄のような広島。」という言葉が印象に残っています。この言葉を聞いたとき、想像しがたい恐怖を感じ、私の心に刺さりました。戦時中は毎日のように空襲警報が鳴り、生きているだけで精一杯だったとおっしゃっていました。被爆体験者の方の話を通じて、戦争がもたらす悲劇や人々の苦しみを直接的に感じることができました。

(3) 広島への訪問から学んだこと

広島は原子爆弾によって破壊され「75年間は草木も生えぬ」と言われました。しかし今は、復興を遂げて、世界中から多くの人々が訪れる平和を象徴する都市になっていました。

平和記念資料館を見学し、原爆が投下された約2か月後の写真を見ました。人影はどこにもなく、ほとんどの建物が破壊された様子は、被爆前の広島とは比べものにならないほどの悲劇を物語っていました。他に「原爆によってボロボロになった生徒たちの学生服や帽子」「火傷を負った人達の写真」「黒い雨の跡が残った白壁」なども展示されていました。私はこれらの展示物を見て、原爆の恐ろしさを知りました。

(4) これから私たちにできる（していきたい）こと

私たちは、戦争がもたらす悲劇を忘れず、今回学んだことをより多くの人に伝え、戦争の恐ろしさと平和の大切さ、命の尊さを広める活動をしたいです。

3 研修を終えて

資料館では、目を背けたくなくなってしまうようなものもありましたが、原爆の悲劇と平和の大切さを伝える大切な場所だと思いました。広島は平和を象徴する都市でもあり、広島がどのように復興に取り組み、発展してきたかを知ることで、人々の強さや平和への希望を感じることができました。

広島への訪問は、戦争、原爆について詳しく学ぶことができ、貴重な体験となりました。

研究課題：命の尊さとは

下根中学校 2年 小山葉奈

1 参加の動機

元々、戦争には興味がありもっと深く知りたいと思っていたところ、平和使節団を見つけ参加しようと思いました。また、自分の興味のあるものを深く調べ極めるのが好きというのも理由の一つです。

2 研修の記録

(1) 講話「戦争の時代と牛久」から学んだこと

報道等で確かではない情報が流れていた事や、情報が隠蔽されていたことに驚きと悲しさを感じました。また、一日に配給されるお米は 300 g（コンビニのおにぎりを 100 g としたら、一日おにぎり三個）だと聞いたときに、当時どれだけ過酷だったのかが分かりました。

(2) 被爆体験者のお話から学んだこと

色々勉強になったことがあったが、その中でも「忘れられた過去は、繰り返す」という言葉が印象に残りました。この言葉を聞いて思ったことは、「“原爆”を忘れてしまったらその過去がどれだけ恐ろしかったか、どれだけの命が犠牲になったか、どれだけの人がお国のために飛行機に乗って行ったかが後世に伝わらず、また同じことを繰り返したくさんの命が犠牲になるかもしれない。そうならないために受け継いで。」というのを、伝えようとしているのだと思いました。

(3) 広島への訪問から学んだこと

実際に訪問をして、写真で見たのとまったく違い、原爆の恐ろしさをすごく感じました。原爆ドームでは崩れたレンガがはっきり見えたり骨組みだけが残っていたりして、改めて原爆の恐ろしさを知りました。資料館では、被爆した方の写真や遺書、身に着けていた衣類などが展示してあり、8月6日の光景が目の前にあるように感じました。しかし、今の広島からは想像が難しく、残酷で信じがたい光景でした。そして、二度と繰り返してはいけないことだと思いました。

(4) これから私たちにできる（していきたい）こと

私たちには後世の人に伝え受け継ぐことしかできないと思いました。当たり前を過ごしている今は、「当たり前」ではないということ、また色々な犠牲の上で今ができているということを伝えていきたいです。

3 研修を終えて

研修を終えて、改めて平和の大切さ、命の尊さ、原爆の恐ろしさを知れました。次は、それらをわかりやすくまとめ、簡潔に伝え後世に受け継げるよう努力していきたいと思いました。

研究課題：戦時中の日本を軽視しつつある社会に 当時の悲惨さを伝えること

下根中学校 2年 鈴木 希怜

1 参加の動機

今回、私が牛久市の中学生平和使節派遣事業に参加した動機は、原爆投下から八十年余り、時代の流れとともに、戦時の日本を軽視しつつある世の中に、当時の惨状を伝えたく、当事業に参加したのが理由です。テレビなどの報道や特番でも伝えられる当時の出来事を、私自ら現地へ旅立ち、様々なことを学び・経験したくなったのも理由の一つです。

2 研修の記録

(1) 講和「戦争の当時の牛久」から学んだこと

今回の講話などを通して学んだことは、牛久自体に空爆や攻撃による被害はなかったものの、近隣の都市が空爆や攻撃に巻き込まれ多くの死者が出たこと。そして、牛久から戦争で旅立った兵士の多くもなくなったことがわかりました。

(2) 被爆体験者の講話から学んだこと

今回、被爆者の梶本淑子さんからお聞きした原爆投下時の広島について、印象に残ったのは、被爆者の語る、当時の広島は「まわりのみんなはお化けだった」こと。梶本さん自身も恐怖に怯えながら過ごした日々や当時の広島的情景、そして、被爆者が現代を生きる人々に伝えたい想いなどがわかりました。被爆者が伝えたい想い、それは「今を生きる人たちは、命を大切にしてほしい」ということ。私も、この文書を読んでいる人々も、命を無駄にせず、最後まで精一杯生き延びてほしいと語っていました。

(3) 広島への訪問から学んだこと

この度、広島を訪れ学んだことは、原爆によって壊滅された市街地から変わり果てた今でも、当時の惨状を伝える痕跡が残っていることがわかりました。何よりも印象に残ったのは、当時の文化が八十年余りたった今でも引き継がれていること。広島には、今でも折り鶴を折る文化が残っていました。今では平和の思いを込めるシンボルとなり、その思いは広島を訪問して、いたるところで見かけました。

(4) これから私たちにできる（していきたい）こと

今、地球上では、至る所で戦争や紛争が起きています。戦争をすぐに止めることはそう簡単にはできません。ただ、戦争をさせないようにすることはできます。今年行われた平和式典に参列された広島市内の小学生は、「願うだけでは、平和は訪れません」と語っていました。私たちにできることはただ一つ、戦争や争いごとを起こさないことです。争いごとを起こさないためにも、お互いの意見を尊重しあうなど、小さな気遣いが大事になってくると思います。

3 研修を終えて

今回の研修を終えて、一番実感したのは平和に対する姿勢だと思います。今の地球は、とても平和とは言えません。そんな世の中を変えるためにも、一人ひとりが意識していくことで、少しずつ変わっていくと思います。少なくとも、この文章を読んでもらえただけ、当時のことを知ってもらえたと思います。今一番大事なのは、平和に対して祈るのではなく、行動することだと思います。

研究課題：原爆と人々

下根中学校 2年 山越 弘大

1 参加の動機

今もウクライナとロシア、パレスチナとイスラエルの戦争が続いており平和についてより詳しく学ぶことや、住んでいる日本で過去にこのような戦争があったのかを詳しく知りたかったからです。

2 研修の記録

(1) 講話「戦争の時代と牛久」から学んだこと

牛久は農村部だったため空襲にあうことはなく、戦場にはなりませんでしたが、戦争のために人も物資も動員され、中には自分たちと同じような中学生やさらに下の小学生も戦争のために働いていたと聞き信じられない気持ちでした。政府の情報統制により偏った情報が伝わって、国民が戦争に協力していたことに恐怖に感じました。

(2) 被爆体験者のお話から学んだこと

被爆体験者は当時、自分たちと同じ中学生で被爆を体験しました。自身も大けがを追いながら友達を助け、いたるところには死体がおかれた街を歩き、カエルやバッタなど食べられるものは食べて飢えをしのいで命を繋いだという話を聞きました。今では考えられないようなことがたくさんあり、想像するだけでゾッとしました。しかし、それが現実だったということを受け止めなければならなかったと感じました。

(3) 広島への訪問から学んだこと

原爆ドームや平和記念資料館の展示物など間近で見て、原爆の恐ろしさをひしひしと感じました。特に印象に残ったのは、平和記念資料館に展示されていた「たくさんの骸骨」の写真です。たった1つの爆弾で多くの人々が亡くなりました。身元が分からなくなってしまうほどの破壊力で、そして、その後も続いた広島の人達の苦痛を知ることができました。戦争は本当に悲惨で、平和がどれだけ大切なものかを実感しました。

(4) これから私たちにできる(していきたい)こと

広島や長崎に原爆が落とされたことは皆さん知っていると思いますが、なぜ落とされたのか、なぜ広島や長崎だったのか、その原爆の威力や被害を直接見たり聞いたりした人は少ないと思います。

そのような人たちにも原爆の恐ろしさをより深く知ってもらい戦争を二度と繰り返さないように多くの人に伝えていきたい。

3 研修を終えて

まずは、自分が行動することが大切だと思います。被爆体験者の梶本さんは「過ちは繰り返される」と言っていました。二度と繰り返さないためにもまずは自分たちがこの体験を多くの人に伝え行動していきたいです。

研究課題：今でも残っている原爆の影響

下根中学校 2年 横山 会咲

1 参加の動機

太平洋戦争に興味があったため、原爆の影響が実際どんなものなのか実際に見てみたいと思ったため。

2 研修の記録

（1）講話「戦争の時代と牛久」から学んだこと

その当時、国は戦争が負けていることを隠すため正しい情報を伝えず勝ったという嘘を伝えていた。国民に戦争の正しい状況が伝えられず負けていることを知らず勝っているかと思っていた。食料が配給制、家ごとに配るようになり大した量がもらえずにいて、みんなおなかをすかしていた。牛久からもたくさん戦争に行く人がいて我々と同じ中学生くらいの少年が戦地に行った。

（2）被爆体験者のお話から学んだこと

その日はいつものように中学生は建物を壊したりする建物疎開や工場で作業していた。被爆して逃げるとき大けがしていたが自分たちで手当てして頑張って逃げた。ほかの重症の人を助けるために動いたが、人の死体を踏んでもなんとも思わなくなってしまった。その何十年後にがんになり友達もがんになってみんな死んでしまった。

（3）広島への訪問から学んだこと

資料館で被爆した人の写真や遺品を見て人間に対する影響や威力がわかった。被爆する前の写真と被爆後の写真を見比べて人の命と暮らしを簡単に奪ってしまうということが分かった。79年たったが原爆に対する恐怖と被爆の悲しみは変わらないのだと実感した。たくさんの人たちが原爆を二度と使ってはならないという気持ちでいることを知った。

（4）これから私たちにできる（していきたい）こと

原爆の威力と悲惨さを伝える、原爆は使ってはならないと伝える、平和のためにできることを考える、今も残っている原爆の遺産をみる、今もある紛争に対して考える、特攻についてもっと知る、第二次世界大戦に対してもっと調べる。

3 研修を終えて

原子爆弾の威力と悲惨さが知ることができた。昔のことだがいろいろ知ることができたので、その過ちについて伝えていきたい。二度と繰り返してはいけないと思った。

研究課題：人はなぜ争うのか

牛久南中学校 2年 柏葉 雄太

1 参加の動機

私は親や祖父母から戦争について話してもらったことはありましたが、周りに戦争の跡がないためよく理解できませんでした。そこで、親の勧めもあり今回の使節団に参加しようと思いました。

2 研修の記録

(1) 講話「戦争の時代と牛久」から学んだこと

当時の牛久は農村だったため直接的な被害は受けなかったが、土浦や霞ヶ浦に軍事施設があったため上空に爆撃機が通ることはあったということを知りました。また、日本各地で戦争の影響があったので、牛久からも戦争に行く人がいたり、食糧難があったりしたことが分かりました。

(2) 被爆体験者のお話から学んだこと

被爆体験者の話を聞いて感じたことがあります。それは家族の大切さです。広島に原爆が落ちたのは子供たちなどが働きに出ている日中だったため、家族が最後に聞いた言葉は「行ってきます」だったそうです。いつもの日常から急に家族が消えることがどれだけ怖いことか。当時の親たちの気持ちを思うと、私は家族を大切にしていこうと思いました。

(3) 広島への訪問から学んだこと

今の広島は自然と人が調和するととてもいい都市ですが、被爆当時の広島は75年草木が生えないといわれるほどのさら地でした。すべてが崩壊した広島がここまで発展を遂げたのは、広島の人々の復興への強い思いがあったからだと分かりました。広島の人々は原爆の跡を戦争遺産として残し、二度と核爆弾が使われないようにしています。何より広島で一番学んだことは、人が人に伝えることのすごさです。広島は原爆の怖さを世界各国に伝え、日本政府や世界各国から多くの支援を受けました。そのおかげで広島は自然と調和するととても良い都市になりました。

(4) これから私たちにできる（していきたい）こと

私たちは被爆体験者のお話や広島の人たちのお話を聞き、広島で多くのことを学んできました。その人たちが口をそろえていうことが、「被ばくや戦争について忘れないよう、伝えていくことが大切だ」ということです。私も被ばくや戦争についての知識は曖昧だったため、今回広島にそれらについて詳しく知る良い機会になりました。中でも被爆体験者のお話は、被ばくについて深く知ることができました。しかし、時代が流れるにつれて被爆体験者は少なくなってしまいます。そこで、私たちは被爆を体験していなくても被爆体験者のお話を聞いた者として、次の世代に伝えていかなければならないと思いました。

3 研修を終えて

私は今回の研修で伝えることの大切さを学びました。平和公園や平和資料館など多くの所に行きましたが、一番戦争や被ばくについて知ることができたのは、被爆体験者や平和公園の人のお話でした。戦争の遺産を見るより人から話を聞くほうが、学びを深める機会になりました。しかし、その話をしてくださる人も限られています。これからは、私たちがその話を身近な人に伝えなければなりません。伝えることで戦争や被ばくも忘れられてしまうことがなくなります。だから、伝えることは大切だと学びました。

研究課題：世界で唯一被爆した国、日本広島県の過去と現在

牛久南中学校 2年 石橋 将煌

1 参加の動機

自分はもともと原爆などのことに興味があり、それを自分の目で見て知りたいと思ったからです。

2 研修の記録**(1) 講話「戦争の時代と牛久」から学んだこと**

牛久は空襲による直接的な被害は少なかった。だが、霞ヶ浦近辺に霞ヶ浦海軍航空隊や土浦海軍航空隊などがありそこが空襲の標的となり、牛久近辺は爆撃機の通り道となることもあったようです。牛久も米の配給制や金属回収令により大変な生活だったそうです。

(2) 被爆体験者のお話から学んだこと

私たちは梶本さんの体験談についての話を聞くことができました。

まず梶本さんが14歳の時に原爆の被害を受けました。その時、梶本さんは工場の中にいて、突然光が見えたそうです。ものすごい爆発音で気が付けばあたりは真っ暗になっていて、右腕がずきずきしていたそうです。

そのあと友達が「灯りが見えるから逃げよう」と言って梶本さんは外に出ました。だが外は、家がなく、魚が腐ったようなにおいがしたそうです。腕がもげている人がいて、その人はもげた腕を大事そうに持ったまま亡くなっていったそうです。当時は学校で男子も女子も作業をし、みんな作業準備中でした。生徒が「飛行機が来た」と言いましたが、先生は「空襲警報出ていないし、大丈夫だ」と思っていたそうです。私はこの話を聞き、警報が出ていないからといって安全ではないということをもう一度認識しました。

最後に梶本さんはおっしゃいました。「原爆の時に残酷な死体をいっぱい見てきた、だから命を大切にしてくれ」と。この言葉を最後に聞き、これからは被爆体験者の方々のことを思い、命をととても大切にしていこうと思いました。

(3) 広島への訪問から学んだこと

今では世界文化遺産になった原爆ドームですが、それはもともと1915年(大正4年)にチェコの設計士により考えられ、広島の特産物を販売していた建物です。私は原爆ドームとはただの町の象徴でと考えていたため、とても驚きました。

1945年(昭和20年)8時15分、相生橋を目標として、上空9600メートル地点で原子爆弾(リトルボーイ)が落とされました。実際は島病院の上空580メートル地点で炸裂しました。地上の温度は3000～4000℃になったそうです。今の平和公園が昔は旅館などがあったということも知りました。

私は広島を訪れ、これらのことを知り、たくさんを感じました。さらに原爆で亡くなった方々への思いが深まりました。

(4) これから私たちにできる(していきたい)こと

私は実際に原爆の恐ろしさについて見たり、聞いたりしたため、学校に行った際には、進んでこれらの話を伝え、少しでも多くの人に原爆の恐ろしさを知ってもらいたいと思いました。

3 研修を終えて

実際に広島を訪れ、平和資料館などに行って原爆の恐ろしさについてより深く知ることができ、自分にとってとても忘れられない体験になりました。ただ自分が知ることによって終わりにしないで、学校の友達などに伝えて、少しでも多くの人に原爆の恐ろしさを知ってもらう必要があると思いました。

研究課題：広島に落とされた原爆

牛久南中学校 2年 仁平 実花

1 参加の動機

現在、ウクライナとロシアが戦争をしており、テレビでたくさんの死傷者が出ていることや、たくさんの建物が焼けて無くなっていることを見て、広島に落とされた原爆はどのくらいの威力でどのくらいの方々が亡くなってしまったのかを実際に現地に行き、遺品や記録を見ることで牛久南中学校の全校生徒に伝えたいと思ったから。

2 研修の記録

(1) 講話「戦争の時代と牛久」から学んだこと

牛久は、直接戦場になったわけではないが、日本全国ではほとんどの地域が直接戦場ではなかった。しかし、日本の全ての地域が戦争と無関係でいらなかった時代であり、牛久も例外ではなかった。牛久市は、空襲の標的となるような施設がなく、直接的な被害はなかった。しかし、付近に霞ヶ浦海軍航空隊などがあったため、爆撃機の通り道になることもあった。

(2) 被爆体験者のお話から学んだこと

被爆者の梶本さんに聞いた話によると、当時原爆が落とされたとき、梶本さんは軍服などを作る工場に働いていた。原爆が落とされた時、この光を浴びたら死ぬと思い顔を手で隠し、機械の中に隠れた。このことから、梶本淑子さんはその行動をしたおかげで今こうして生きていると思っている。工場は木造の二階建て全てが破壊されてしまっていたのでそれからしばらくして梶本さんは父と再会したが、父以外の家族はみんな死んでしまったので、父が目の前にいることが信じられなかったそうです。話を聞いて、それだけたくさんの死者数があるということだと思った。最後に梶本さんは最近のほとんどの若者は原爆のことを知らないの、悲惨さを伝えるためにもこのように伝えている。最後をお願いしたいことは、今普通に生きていることが幸せで、命を大切に生きてほしいと語っていた。

(3) 広島への訪問から学んだこと

原爆ドームは、本やテレビなどで見たときよりも悲惨な姿だった。広島に原爆が本当に落とされたのだと実感したのは原爆ドームの姿だけでなく、原爆で亡くなった方達の遺骨が入っている供養塔、広島に投下された原爆について詳しく書いてある平和記念資料館の資料など、たくさんあった。建物の屋根が無くなるほどの熱と放射線を浴びたとなると、考えたくないほど辛かったのだと思った。

(4) これから私たちにできる（していきたい）こと

牛久の代表として地域の人たちに私たちが広島で学んできたことを伝えるのはもちろん、被爆体験者の話からもあった通り、今こうして生きていることを当たり前とは思わずに、命を大切に生きていきたいと思う。

3 研修を終えて

私は、初めて広島に行き、どのようなことが被爆者を襲ったのか、どこで原爆が落とされ、原爆はどのくらい恐ろしいものなのかということ学んできた。本などでは広島について学んだことはあったが、実際に平和記念資料館などに行き、被爆体験者のお話を聴き、実際に原爆ドームを見ることで、戦争とは悲しく、悲惨なことだということを改めて実感することが出来た。また、広島に行き、きちんと地域の人たちに原爆のことを伝えられるのかということが不安だったが、広島に行き本で読んだよりも、実際に行きたくさんのことを学べたと思った。

研究課題：戦時中と戦後の被爆者への影響

ひたち野うしく中学校 2年 安藤 紗良

1 参加の動機

広島には何度か行ったことがあるが、今回見学させていただいた被爆施設などを訪れたことがなく、また、被爆者の方からお話を聞くような機会はそうそうないと思い興味を持ったから。また平和使節団として広島に行き学んで戦争の悲惨さを伝えていきたいと思ったから。

2 研修の記録

(1) 講話「戦争の時代と牛久」から学んだこと

原爆が落ちた後ももとは壊す予定だったが、21年間残すか残さないかで議論をし、永久保存することになった。牛久市は直接戦場になったわけではないということを知った。日本全国では戦場になっていない地域が多いということも分かった。しかし、戦争と無関係ではいられなかった時代で、多くの人々にとって戦争の情報に触れるのは当時、新聞とラジオしかなく、またその情報も正しい情報でなかった、ということにも驚いた。

(2) 被爆体験者のお話から学んだこと

戦時中の女学生は防災頭巾と救護用具を毎日もっていたことに驚いた。そのくらい毎日びくびくしながら過ごしているのは大変だなと思った。そうやって持ち歩いていて助かった命もあったのかなと思った。

(3) 広島への訪問から学んだこと

広島への訪問で学んだことは、平和は何もしなくてももらえるものではない、ということだ。いま日本が平和なのは国自体が核兵器を禁止しているからであって、核兵器を使ってもよいことになったら、きっとたくさんの戦争が起こると思う。そのため、今核兵器を持っている国には使用を禁止することを強く呼びかけたいと思った。

(4) これから私たちにできる（していきたい）こと

わたしたちにできることは、戦争の悲惨さをたくさんの人に伝えていくことだと思う。それは、とても大切なことだと思うし、戦争の悲惨さを語り継いでいくことは未来に同じような過ちをしないことにつながると思う。また、戦争の悲惨さを伝えていくだけでなく、平和の尊さも伝えていきたい。

3 研修を終えて

たったひとつの原爆で、広島は街は一瞬で破壊され、たくさんの方が亡くなり苦しんだ、という事実がとても怖かった。しかし、その怖さを知って、戦争は本当に良いことがないんだなと感じた。また、今の平和な世の中に感謝しながら生きていこうと思った。

研究課題：広島復興までの歩み

ひたち野うしく中学校 2年 赤塚 みのり

1 参加の動機

シンガポールの国立博物館で日本がシンガポールまで攻めていたことを知って、自分はまだまだ無知なことを実感し、原爆について実際に自分の目で見て感じたいと思ったからです。

2 研修の記録

(1) 講話「戦争の時代と牛久」から学んだこと

戦時中は物資が不足し学生たちも工場などに派遣された。今では食べるものがないなんて聞いたこともないし学校だって、ほとんど必ず行けている。今はこの状態が当たり前だが、戦時中は戦争に多くのことを費やして子供も働かされ戦地に行くということに衝撃を受けた。また、今の時代はとても恵まれているなど思った。

(2)被爆体験者のお話から学んだこと

原爆が落とされた時は、私たちの想像をはるかに超える苦しみを受けたのだと思う。皆感覚がおかしくなって死体も気にならなくなり、痛みもわからなくなるくらい必死だったということが分かった。

(3)広島への訪問から学んだこと

平和公園や資料館、被爆体験者の話を聞くことによって、原爆の恐ろしさと広島の人たちのもう二度と原爆を使ってはならないという思いを知ることができた。原爆は 79 年たった今でも大きな爪痕を残していることが分かった。

(4)これから私たちにできる（していきたい）こと

またあの悲劇を繰り返してはいけない。でも、忘れられた歴史は繰り返される。そのためにも今回、平和使節団として広島に行き学んできたことを、皆に伝えていきたいと思う。

3 研修を終えて

広島については学校や本などで得た情報で知っているつもりでしたが、実際に広島に行ってみると知らないことが多く、知っていると思っていたことについてもより詳しく知ることができた。

研究課題：戦争当時の広島の現状を知る

ひたち野うしく中学校 2年 阿久津 沙文

1 参加の動機

私は海外にとっても興味があります。海外のことを知る前に日本のことをしっかりと知っておかなければいけないと思いました。そのために戦争についてもっと詳しく知りたいと思い参加しました。

2 研修の記録

(1) 被爆体験者のお話から学んだこと

平和記念資料館や本川小学校で学ぶことができ、とても貴重な時間でした。中でも被爆体験者のお話を直接聞くことができ、様々なことを考えさせられました。特に印象に残っているのは、自分の生存などを知らせるために外壁に氏名等を記したことです。普段携帯などを利用し簡単に連絡をとったり、生命のことを深く考えたりしなかった私にとっては想像のできないことでした。どんな気持ちで自分の名前を書いたのだろうと思いました。

先生の指示で友達を担架に乗せて「大芝公園」に運んだそうです。大芝公園は酷い惨状で、そこら中が目や心臓が全て飛び出た死体で埋めつくされており、地面は血でぬるった川のような状態です。その中を友達のために死体を踏んづけながら進んだり、翌日もウジ虫まみれになった友達を運んだそうです。私には全く想像ができないけれど、恐怖の中友達のために行動したことが凄いいと思いました。

(2) これから私たちにできる（していきたい）こと

戦争で起こったことを忘れないこと、多くの人に伝え続けることだと思います。また、私は今回の経験を活かし戦争と平和について学び続けていきたいです。

3 研修を終えて

実際に広島を訪れて様々な気づきや発見もありましたが、胸がとても痛くなるようなこと、目を背けたくなるようなことも多くあり悲しい気持ちになりました。その中で戦争により奪われる人権が沢山あることも知りました。戦争により、様々な権利を制約されたり、否定され、強制で何かをすることは私には考えられないことでした。

戦争中は学校に行くこともままならず、私と同じ中学生が強制労働していたことを知りました。本来なら私と同じように、楽しく友達と遊んだり、運動したり楽しい毎日を過ごしていたと思います。でも自分が全く望んでいない過酷な仕事を家族や国のためにしたそうです。私はたくさんの夢や希望があります。このように夢や希望を考えながら生活できることも当たり前ではなく、日本が平和だからだと強く感じることができました。世界ではまだ戦争している国があり、生活や生命を脅かされるような状況の人々もいます。自身の日常に感謝して過ごしていきたいです。そして、一人一人が尊重され、平和な世界になるように今回の経験を活かし少しでも貢献したいです。

研究課題：昔と今の生活の違い

ひたち野うしく中学校 2年 千葉 柊香

1 参加の動機

去年の平和使節団の人たちが発表しているのを見て興味を持ち自分も広島に行って学んでみたいと思ったからです。そして広島に行き、戦争のことを学んで、それをほかの人たちに伝えるため、私は平和使節団に参加しました。

2 研修の記録

(1) 講話「戦争の時代と牛久」から学んだこと

牛久市は戦場にはならなかったことを学びました。だけど戦争のために人や物資の援助をしていたので戦争には加担していました。当時は、テレビなどもなかったので情報を得るには新聞しかありませんでしたが、その情報も正しくなかったことを知りました。

(2) 被爆体験者のお話から学んだこと

原爆当日は、雲一つない晴天でした。もし天気が悪かったら、原爆は、落ちていなかったと聞きました。原爆が落ちた日、広島の学生たちがいつもと変わらず建物疎開の作業に取り掛かろうとしていた時原爆が落とされました。その一瞬で広島のまちが全滅しました。

原爆の熱や爆風により、全身やけどした人達やけがを負った人いろいろな人達が原爆で苦しめられました。肌の皮がはがれながら歩いている人、助けを求めている声や水を求めている人たちがいました。水をもらってすぐに死んでしまった人や、放射能で死んでしまった人、今でも放射能で苦しんでいる人がいることを学びました。

(3) 広島への訪問から学んだこと

私が広島への訪問から学んだことは、広島は被害を受けながらも復興を果たしているということです。広島への訪問から被爆者や人々の平和の願いと復興しようという気持ちを強く感じました。

(4) これから私たちにできる（していきたい）こと

平和と命の大切さを理解し、大事にしなければならないと思います。二度とこの過ちを起こさないように戦争の愚かさと命の大切さを、人々に伝えていきたいです。

3 研修を終えて

私はこの体験で命の大切さと戦争の恐ろしさを改めて感じました。そして平和がどれだけ大切なものか、尊いものか、ということをより多くの人に伝え、日本や世界を平和にしていきたいです。

研究課題：原爆後からの復興の様子

おくの義務教育学校 8年 神賀 小夜

1 参加の動機

授業ではあまり触れられていなかった日本の戦争についてもっと深く知りたかったから参加しました。

2 研修の記録

(1) 講話「戦争の時代と牛久」から学んだこと

牛久は直接戦場にはならなかったことや戦争のために物資や人を集めたり金銭の負担をうける場所であったことがわかりました。

(2) 被爆体験者のお話から学んだこと

- ① 当時は爆弾が投下されるのが日常的な時代だったことから、当時の人たちにとって戦争下で生き抜く事が必要だったことが分かりました。
- ② 親や上官、教師などの目上の人の命令が絶対だったことから、今とは違う考えが普通だったのが分かりました。
- ③ 被害者が焼かれた煙の臭いは何日も残りほかの人たちの服に染みついたことから異様な世界であったことが分かりました。
- ④ 怪我をしたとき、患部が心臓と同じ高さにあると痛みは少なくなることから、骨折などをしたとき腕を同じ高さにするという対処が正しいことが分かりました。

(3) 広島への訪問から学んだこと

- ① どれだけ大きな被害を受けても、人の思いと努力で復興することができること。
- ② 路面電車は地下鉄を作ることができない土地だったから生まれたもので、環境によって生まれるものは変わることが分かりました。

(4) これから私たちにできる（していきたい）こと

- ① 記録や記憶を伝え残していくこと。
- ② 規制などをかけず自分の思いを自由に伝えること。

3 研修を終えて

原爆は 80 年近くたった今でもその被害が残っているということと、当時は戦争という間違った方向で人が団結してしまっていたことがわかりました。